

草庵仏教

第226号
(発行日)

2009年4月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 開法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○ 聖典共学会 --- 毎月6日。

午後7時より。

* 8月22日同朋の会および8

月12日念仏座談会は休みます

十字名号の意味

宗祖親鸞聖人は日頃、お念
仏を申される時は南無阿弥陀
仏の六字の名号を称えておら
れたようですが、礼拝の対象
には〈帰命尽十方無碍光如来〉
という十字のお名号を掛けて
拝んでおられたようです。そ
れほど帰命尽十方無碍光如来
の御名を尊ばれたのでありま
す。

そして聖人は、この〈帰命
尽十方無碍光如来〉の御名の
意味を註釈された中で、〈尽
十方〉という御言葉について、
『尊号真像銘文』には
尽十方無碍光如来ともうす
は、すなわち阿弥陀如来なり。
この如来は光明なり。尽十方
というは、尽はつくすという、
ことごとくという。十方世界
をつくして、ことごとくみち
たまえるなり
とお示しになっていきます。
これによりますと、阿弥陀
如来様は十方世界をつくして
ことごとく満ちておられると
仰せになっていきます。十方世

界のありとあらゆるところに
阿弥陀様はましまして、阿弥
陀様のいなさらぬところはな
いといわれています。

十方世界というのは東西南
北にある世界、それに北東・
北西・南東・南西で八方で、
いわばあらゆる方角の領域、
そして上方世界と下方世界で
十方になります。上方とは天
上界で神々の世界といわれ、
下方とは地獄・餓鬼・畜生の
三悪道の領域といわれています。

ですから四方八方のみなら
ず、地獄や餓鬼などの苦し
みの領域にも阿弥陀様はいてく
ださると申されるのです。
この事は、私たちについて
いえば、私たちがどんな状況
になろうとも、どんな境界に
いても阿弥陀如来様は私たち
と共にまします。たとえ地獄
に堕ちても阿弥陀様は私たち
と共にまします、といわれて
いるのでありましょう。
それは当然、私たちだけで
はありません。生きとし生け

るものすべてに通じます。身
近なお子さんにもお孫さんに
も隣人にも、孤独な人のとこ
ろにも、病床に伏している人
のところにも共にまします。
また、亡くなった方々は今
どこにいるのでしょうか。浄
土に生まれて仏になっておら
れる方もありましようが、そ
うでない方もおられましょ
う。けれども、すべてのもの
に阿弥陀様はついていて下さ
るのでありましよう。

しかも阿弥陀様は、共にい
てくださるだけではなくて、
常に私たちにであおうと喚び
かけておられるのでありま
す。ですから、単に阿弥陀仏
といわず、南無阿弥陀仏の
名号)とか帰命尽十方無碍光
如来の(名号)とか申される
のです。
名号という文字は動詞的に
いえば、名を言い表す、名乗
る、号(さけ)ぶ、という意
味があります。

こうして阿弥陀仏は、南無
阿弥陀仏の名号となって万人
に喚びかけ、迷い(孤立した
自我)の中にいる私たちを喚
び覚まそうとして、名乗って
下さるのであります。
喚びかけることによって、

阿弥陀様ご自身の存在を私た
ちに知らせ、阿弥陀様の救済
意志を明かして下さるのであ
ります。

その救済意志は、〈無碍光
如来〉というお言葉に表され
ています。〈無碍〉とは、私
どもの悪業煩惱に「さわりな
く」(無碍) 助けたもう仏徳
を表されたお言葉です。

そして〈光如来〉というの
は、光は光明で、一切衆生の
闇を照らし、苦しみ迷いの世
界から救いたもうお働きであ
り、それは真実の世界(如)
から迷いの世界に〈来〉たり
て救いたもう光明のお働きを
表されたお言葉でありましょ
う。

この無碍のお心がことにあ
りがたいですね。私たちのど
のような罪も煩惱も、どうに
もならないお粗末な人間性
も、劣れる性格も、それらに
阿弥陀仏の撰取の働きは妨げ
られずに、「生まれつきの、
今のそのままなりで助ける、
引き受ける」と働いてくださ
る大悲のお心が無碍のお心で
あります。(助ける)とは、
私たちをまるまる引き受けて
浄土に至らしめて下さること
です。
そしてただ無碍のお徳だけ

ではなくて、「我をタノメ、まかせてくれよ」とまで仰せ下さるお言葉が帰命、いわゆる「帰せよの命」なのであります。帰せよとは、(我をタノメ)の大悲の命令。タノメとはお願い事や頼み事を仏にせよということでは勿論ありません。タスケルでまかせよ、引き受けるから、ゆだねてくれよの大悲のお心であります。

そこで(帰命尽十方無碍光如来)は「ここにいますよ、ついでにいますよ、汝をそのままなりのりで引き受けて助けるから、そのまま我にまかせよ、助けさせてくれよ」とのお喚び声であります。この大慈大悲に驚き、「ああ、お念仏はこんな私のためでしたか」と、大悲心に浴するのです。大悲心が我が心に至って、私の心をおさめとって離さない利益にあずかせて下さるのであります。(了)



輪帽子
(C)SHOGAKUKAN
INC.

正信偈に学ぶ問答

(十四)

普放無量無辺光

無碍無对光炎王

清浄歓喜智慧光

不断難思無称光

超日月光照塵刹

一切群生蒙光照

(書き下し文)

普く、無量・無辺光、無碍・無对・光炎王、清浄・歓喜・智慧光、不断・難思・無称光、超日月光を放つて、塵刹を照らす。一切の群生、光照を蒙る。

*

G 「先回は無量光・無辺光についてお聞きしましたが、今回は(無碍)についてお話し下さい。無碍とは無碍光という阿弥陀仏のお徳を表された言葉ですね。阿弥陀仏の徳のなかで無碍光の徳とはどういうお徳ですか」
D 「聖人は阿弥陀仏の無碍のお徳について『一念多念証文』

無碍ともうすは、煩惱悪業に

さえられず、やぶられぬをいうなり。

と申され、さらに『尊号真像銘文』には

無碍というは、さわることなしとなり。さわることなしともうすは、衆生の煩惱悪業にさえられざるなり。

と仰せられています。阿弥陀仏のお助けは私たちの煩惱悪業にさまたげられず、煩惱悪業の私なりで、そのまま引き受けて助けたもう大悲の徳でまします。そのさわりなく助けたもうお徳を、無碍光の徳というのです」

G 「私たちの悪業煩惱がどれほど深くとも、そのことによつて阿弥陀仏は救われないとも救えないとも仰せられなくて、(煩惱悪業はいかほど深くとも、汝のままなりで助ける)と仰せ下さるのですね。そういう広大な徳を阿弥陀仏は具えておられる。何故ですか」

D 「それは私のような愚かな者にとっては不思議としかい

いようがありません。ただ阿弥陀仏は法蔵菩薩となつて、一切衆生の一人一人の罪業を浄化して仏になさんがために、一人一人にかわつて永劫の御修行をされ、罪業深き私たちを仏に為したもう功徳を成就されて南無阿弥陀仏になつておられると、お聞きして

の苦海に沈んでおらねばなりません。『弥陀如来名号徳』に宗祖は
無碍光の徳ましまさざらましかば、いかがし候はましとまで仰せになつています。もし阿弥陀仏に無碍光の徳がなく、私の煩惱悪業の故に私を救いたもうことができないようなら、私はどうして助かる道はないではないか、どうしようもないではないか、とまで聖人は仰つています」

G 「私たちの煩惱悪業を自分分(に)担(にな)われて、私たちの悪業煩惱を浄化し私たちを仏にならしめたもうお徳をすべて成就して下さつたのですね」
D 「ええ、その功徳が南無阿弥陀仏におさまっていると、お聞かせいただいています。宗祖はこうしたことを『教行証文類』に

G 「では煩惱悪業とは何ですか」
D 「煩惱・悪業とは、私たちの煩惱と、そしてその煩惱による行為を悪業と申します」
G 「悪業とは」
D 「悪業の業とは行為のことです。しかし単なる行為ではなくて、将来に報いを結果するような行為を業(カルマ)といひます。業には善業と悪業と無記業とがあります。将来に自らの上に樂をもたらすような行いを善業といい、苦をもたらすような行いを悪業といひます。樂も苦ももたらさないような行いを無記業といひます。無記業というのは服を着たり顔を洗つたりあくびをしたりというような行い

一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして、清浄の心なし。虚仮諂偽にして真実の心なし。ここをもつて如来、一切苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫において、菩薩の行を行じたまいと仰せられています。もし阿弥陀仏が私に代わつて菩薩の修行し(罪悪深重煩惱熾盛の汝のままを助ける)と喚んでくださらなかつたら、私はいつまでたつても助からず無窮

の苦海に沈んでおらねばなりません。『弥陀如来名号徳』に宗祖は
無碍光の徳ましまさざらましかば、いかがし候はましとまで仰せになつています。もし阿弥陀仏に無碍光の徳がなく、私の煩惱悪業の故に私を救いたもうことができないようなら、私はどうして助かる道はないではないか、どうしようもないではないか、とまで聖人は仰つています」

です」

G 「今日では、業という考えが薄くなってますね。自分の行いの善悪によって、苦や楽を自らが受けるという自業自得おことを、多くの人は気にかけなくなっています」

D 「そうですね。善き心でもって善い行いをするとその人の上に安らぎが結果し、邪悪な心を起こし、人を悩ましたり害したりすると、行った人自身の上に苦しみをこうむるという因果応報の教えは自然な道理だと思います。この善因楽果、悪因苦果を信じるところに、自らの生活の上に慎みと反省がもたらされてくるともいえましょう」

G 「昔、へ悪いことをしたら地獄へ落ちる。善いことをしたら極楽に生まれる」ということをよく聞きました」

D 「昔の人たちが悪を恐れたのは、悪業を犯していくなら死後に地獄に落ちることを恐れたのですね。へ善いことをしたら極楽に生まれる」というのは、善をなせば死後に幸せな世界に生まれることができるという意味ですね。ただ、善を為せばへ極楽に生まれる」というのは正確な理解とはいえないが」

G 「因果応報ですから、殺生をしたり、利益のためにごまかしたり、親不孝をしたり、そういう悪業を重ねると死後地獄に落ちる、だからどうかして地獄を免れて、できれば死後に極楽に生まれたいと願う。いわゆる後生の問題ですね。そういう願望から仏法を求め人が昔は多かったのですね」

D 「ええそう思います。今でもそういう方は時々おられます。それは結構なことだと思います。ところが現代は因果応報をまともに信じないし、死後について真剣に考えない。死んだら終わりで、死ぬのは仕方ないからそれまでの人生をエンジョイ（楽しむ）することしか考えないという時代になってきました。とくに先進諸国、なかでも日本がことに顕著ですね」

G 「死んだら終わりでは、自分の悪とか罪というものを真剣に考えなくなりますね」

D 「そう思います。ただ、死後はともかく、人間には、悪をやめて善を行い、善い人間になりたい、善い生き方をしたいという願望が起り得るものです。それゆえ、仏教の

教えに触れる縁などを通して、自分の心や行いの善し悪しを反省し、いかにも自分は浅ましい、おぞましい、なさない自分だと、反省するようになりません。自分の心の中心の煩惱の深さを知らされません、それを悲しみ嘆くようになり、この煩惱を何とかしたいと自然に思うようになりません」

G 「人間には、自分の心を反省し、自分の心の有様を悲しみ、嘆くということが起こるのですね」

D 「ええ、私たちの心は煩惱しかないようなものですが、自分の煩惱が知らされ、己の心の煩惱性を悲しみ、何とかしたいと願うようになると、それは阿弥陀様の光明のお働きが常に私たちの心に働きかけておられるから、その光明の縁が熟して、自分の心を批判し、この心を何とか善くしたいと願うようになるのではないのでしょうか。なぜなら煩惱の心が煩惱の心を嘆いたり悲しんだりはしなれないと思えます。煩惱を超えた浄らかな働き（光明）がかかっているから、光明に照らされてそういうことが起こってくるのではないのでしょうか。一切の

群生は光照をこうむっているからであります」

G 「暗闇の深さは暗闇そのもの中では分からない。光が照らして初めて暗闇が暗闇と知れるようなものですね」

D 「ええ、そう思います。ですから、光明の縁が熟して、我が心の浅ましさが見え始めて、自分の心を問題とし、自分の心を変えたい、善くしたい、という思いが湧いてきます。ですからもうそこには阿弥陀仏の光明が働いて下さっているのですね」

G 「自分の心が問題になり、自分の心に困る。それで何とかこの心を変革したいと願う、仏法を求めようになるのですよね」

D 「ええ、死後に地獄に落ちるのが怖くて仏法を求め人もいますが、それだけでなく自分の人格性を問題にするのが縁となつて、仏法を求め人も当然あるのです。私が親しく教えていただいたお方で木村無相という方がおられました。無相さんは幼い頃、中国の満州で両親と暮らしていました。お父さんは土建業の親方で、賭博が好きで、毎日のように博打をし、幼い無

相さんは警察がこないか見張りをさせられるといった生活でした。それがいやでいやでとうとう十四才の頃に家を飛び出し、平壤で給仕をした

りしてましたが、十七才の頃日本に一人で帰って来ました。そして二十才のある日、ふっと自分の内面に心が向き、自分の中にある、親を恨み憎んでいる恐ろしい心に愕然としたのでした。それから心の中にある醜く穢い煩惱を何とか除きたいと願うようになり、それが縁で、仏法を求めようになったのです」

G 「そして木村さんはどうなったのですか」

D 「結論から申しますと、自己の心の浄化、いわば変革を求めて真言宗の修行をされたのですが、自分の力や修行によって覚（さと）ることもできねば、自分の煩惱の心を浄化することもできないという壁にぶつかり、ついに本願念仏に帰して阿弥陀仏の無碍光の救いであわれました」

G 「煩惱を問題として遂に、煩惱のあるままで救いたもう阿弥陀仏の無碍光の大悲にあって救われたのですね」

D 「ええそうです」（了）

信心夜話

太字は松並さんの言葉。

*

○私やあなたのまことは「おちる」「助からぬ」がまこと。仏様の「信」は「おとさぬ」「助ける」が「信」。その「信」が南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏と聞えて来るのや。

南無阿弥陀仏 それぞれここに今、今ここに、それぞれ 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏と、聞えるでしょう。

(助からんのが私の真相、これがなかなか知れぬ。念仏申して助かる身になろうとしたり、聞いて分かって助かる身になろうとしたり、信じて助かる身になろうとする。助かる身になるなら、阿弥陀仏のお助けはいらぬことにならぬ。助からぬ者だから、〈助ける〉と喚びかけたまうのである。私の代わりに私たちが仏になる因を修行成就して、〈助からぬ汝を助ける〉と今、ここに喚んで下さるのである。私たちにある事実は助からない実〈まこと〉。仏みずから私を助けるに間違いのない信じ切つて下さっているお心が仏の信〈まこと〉。その大悲のまことが今ここに、ナムアミダブツと声になって表

○南無阿弥陀仏 この声を聞いていると、

〈お前に相談なしに、お前の南無阿弥陀仏に成ったぞや。いやでもあろうが、この度はこの弥陀にめんじて、助けさせてくれよ〉と、阿弥陀様が、両手を仕えて、頭を下げて頼んで御座る御姿、御声が、今この口に現れ給う南無阿弥陀仏であります。そうすれば念仏するとか、せねばならぬと言う事に離れて、唯、南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏と聞くばかり。南無阿弥陀仏

(若不生者不取正覚)は、汝が助からねばこの弥陀が助からぬゆえ、と阿弥陀様の方からかたじけなくも〈助けてくれよ〉と頭を下げて、両手ついて、私にたのんでおられる、このこと。ああ、そういう南無阿弥陀仏様でございましたか、有難うございます。このお話を松並さんから何度も直接にお聞きしたが、松並さんは泣きながらこのように仰せられたのであった。松並さんは始終お念仏を聞きつけておられる実感から、ここまで仰せ下さるのである。教法の知識や学問では感知されぬ。一声が阿弥陀様の喚び声と、実感される中での仰せである。まことにおそれることである)

○念仏する御方には、聞けよと言わねばならぬ。即ち聞くまま、南無阿弥陀仏は親の呼び声と知らされる。南無阿弥陀仏

念仏せぬ御方には、念仏せよと言わねばならぬ。念仏は親の声なれば、念仏のない処には仏の声はない。南無阿弥陀仏。

(念仏のないところには仏の声はない。南無阿弥陀仏は声にまでなられた阿弥陀様なれば、念仏のないところでは仏にない難い。だから念仏申さぬ人には念仏を称えることをお勧めする。また、日頃実際によく念仏している人は、自分ではすぐには知れぬが、阿弥陀様と膝つき合わせている関係の中に置かれているのである。しかし、とかく〈称えて助かるう、称えて親にあおう〉と、〈称える私が中心〉に知らぬまになっている。そこに留まってしまふ。称えるのであるが、念仏の声に〈助からぬ汝を助ける〉との親心を聞くのである。称えるお念仏を聞くについて、親心に心を寄せることが大事である)

(了)

《お知らせ》

聖典共学会は

毎月6日 (PM 7時始)

に変更いたします。